

「植生史研究」第1号を発行するにあたって

この春に、4年間続けてきた植生史研究談話会を植生史研究会と改め再出発することになった。そのわけは2つある。植生史研究談話会は、会と名がついても数名の有志の世話によって開催され、その内容も植生史研究の成果をアピールし、異なる領域あるいは視点から意見をうかがったり討論するという性格が強かった。しかし、談話会を発起した頃はそういう意向ではなかった。植生史研究と言わないまでも、植物遺体（とくに花粉）を研究材料とする研究者がいろんな領域で多数の成果をあげていながら、それら研究者間の交流が少なく、何学という殻にこもってしまいよそ見をしないという風潮があった。内在する問題をどっさり抱え込んでいるわりに、なかなかそれらを表面に出せず、時々、何某氏の同定はどうだとかといった話が巷を賑わしている。何となく非健康的である。いろいろな領域のこまごまとした諸問題を一杯でもやりながら気楽に話し合い、あわよくばひざをまじえてくそまじめに討論しようとしたのが、談話会のそもそのきっかけである。しかし、結局その意気込みは生態学会自由集会のふん意気にのまれるかたちとなった。この4年間、本来の意気込みは依然消えず、周囲の方々からも研究会をつくり定期的につっこんだ話のできる会を開くことが切望された。これが1つ目のわけである。

もう1つのわけは、談話会で話題提供された内容はそれまで資料集として会場で配布したり、日本生態学会大会講演要旨集に組み込んできたが、それらはもっとしっかりしたかたちで残されるのがよく、またそれ以外にも、植生史研究のあり方を考えたり、今日あるいは今後の植生史研究にとって集成すべきあるいは紹介すべき資料を記録することが研究者間の理解を深めると考えられたからである。すなわち、機関誌とそれを発行する母体が望まれたのである。

ここにその機関紙とも言える「植生史研究」第1号が発行されるわけであるが、ごらんのとおり、本文はすべて和文で書かれている。ある著者は欧文の要旨を付けてこられたが、わけを説明し諒解を得た上で削除した。わけとは、本誌は当面総説誌というかたちをとり、上述した内容を盛り込んでいくことを主旨とすること、そしてそれらを自国語でない欧文にわざわざ訳す理由がみあたらないことである。あまり先のことを今から考えるのは笑い物になるが、とにかくこのようなスタイルを10年は続けるというのが正直な決意である。

植生史研究会は年2回開かれる予定である。運営をマンネリ化させないために、世話人をいろいろな方にやっていただくのが望ましい。ひょっとすると今までになかった面白い展開があるかも知れない。いや、それはきっとである。